

*E. compressus* は用いられないという理由からである。しかし Müller の原典を見ると *L. compressa* は basionym とは考えられず、*E. compressus* は 1844 年に Müller が記載した新名と見るべきで、従ってこれが適法且つ有効な名である。

## 〇ヒレアザミについて (水島正美) Masami Mizushima: On *Carduus crispus* L. in Japan

ヒレアザミ (一名ヤハズアザミ) は低山の草地や山畑のへりなど、明るい乾燥気味の環境の所に時折見かける。どうも日かげや湿り気味の場所には見られないようである。日本では本州、四国、九州に分布しており、その学名は従来 *Carduus crispus* L. として過されて来た。草丈は 0.5—1 m と個体により、また生育場所により変異が大きい。葉は莖の下一中部で羽状中裂一歯牙縁、丈の高い個体ほど深く切れ込むことが多く、裏面にくも糸状の毛を布く場合もあり、この時には莖中一上部の葉に量が多くなる。この毛は総包には無に等しい位しかでず、全然ないことの方が普通である。莖上半部の葉では基部に比較的広い裂片が 1 対あり、半抱莖の態をなすのが普通であるが、丈の低い個体では次第に狭まって莖に沿下することもある。そう果は完熟すれば長さ 4 mm、未熟でも 3.5 mm 以上あることが多い。これ等の形質、殊に果実の寸法は subsp. *agrestis* の特徴である。少数しか見ていないが、朝鮮半島、北支、シベリア東部産のものも邦産品に一致する。従来の植物誌や図鑑類にはそう果を長さ 3 mm としてあるが、これは subsp. *crispus* の一特徴である。もし此の型のものが日本に産するとしても極く稀であろう。すなわち筆者自身の検した 1878 年 (明治 11 年) 以降の邦産ヒレアザミは *C. crispus* そのものではなく、その subsp. *agrestis* (Kerner) Vollmann, Fl. Bayern 757 (1914)—Rothmaler, Exkurs.-fl. Deutschl. Krit. Erg.-bd. 333 (1963)—*C. Personata* (L.) Jacq. var. *agrestis* (Kern.) Hegi, Ill. Fl. M.-Eur. Durchges. Nachdr. 6 (2): 857 (1954) の方である。白花形を f. *albus* (Mak.) Hara シロバナヒレアザミと称するが、この名はそのまま亜種の下に用いれば良い。

Subsp. *crispus* は葉が半抱莖せずに狭まり、裏面にくも毛を白く布き、総包も多少この毛につづられ、そう果が長さ約 3 mm のものである。これはやや湿った草地、垣根沿い、やぶや河畔林などに生え、subsp. *agrestis* よりも日かげと水気を好むようである。*C. crispus* は Euro-Siberian 分布型に属する冷温帯種と考えて良く、シベリアから東亜にかけての分布相を通観すると興味ある事実に行き当たる。中央アジアではカザクスタン南部、タジキスタン、ウズベキスタンになく、タルバガタイからサヤン地区にあり、蒙古に散生する。シベリア南半部では西部から極東地区まで産し、東亜温帯域に広く分布するに至る。シナ大陸では楊子江以北の地域に主産するらしい。日本を含め、東

亜の *C. crispus* が subsp. *agrestis* のみとはい切れないうが、少くともこの型に属する個体群の方が広く分布しているかに見える。そして東亜の *C. crispus* が「半野生」(北川：満洲国植物考，442，1939)であり、日本のヒレアザミも帰化と考えられていることを考えあわせ、自然分布に加えて人為分布をも想像することができよう。そのルートはシルク・ロードの各路の中でも古いステップ路、および天山北路だったのではあるまいか。ヨーロッパでも subsp. *crispus* よりも *agrestis* の方が耐寒性が強いと考えられるので、気候条件のきびしい中央アジアからシベリアにかけては後者が優位に立ったのであろうか。上述の想像に基けば、ヒレアザミの染色体数を調べれば subsp. *agrestis* の東漸した個体群の子孫を調べたことになり、 $2n=16$  の subsp. *crispus* との関係に一言括めるだろう。また *C. Personata* ( $2n=18, 22$ ) との関係にも言及できよう。

なお Handel-Mazzetti は雲南、貴州、四川、湖北、山西諸省の採集品を *C. acanthoides* L. オオヒレアザミと同定している。これはヒレアザミによく似た一種であるが、莖の翼や葉縁のとげが剛強で、葉裂片頂のもので 3—6 mm、4—5 mm が普通的那样である(ヒレアザミではせいぜい 3 mm で細い)。頭花が枝端に単立することが多いことでも識別し得る(ヒレアザミでは 2—3—5 個ずつ集合するのが普通)。

\* \* \* \*

The Euro-Siberian *Carduus crispus* L. is not represented in Japan, Korea, and perhaps in northern China, by its typical form with achenes 3 mm long, thinly cobwebby involucre, and upper leaves not semi-amplexicaul at the base and white-tomentose beneath. At least the Japanese plants have middle to upper cauline leaves semi-amplexicaul at the base, and not or scarcely cobwebby beneath, involucre entirely glabrous or practically so, and have ripe achenes always 4 mm long or so. This type of plants is referable, according to Rothmaler (Exkurs.-fl. Deutschl. Krit. Ergänzt.-bd. 333, 1963), to subsp. *agrestis* (Kerner) Vollmann of the northern part of the Alps. A closer examination is needed to determine the identity of these disjunctively found populations, though “*C. crispus*” has been reported from western Siberia, Central Asia to the Far East, and from China chiefly north of Yangtze-kiang.

*Carduus crispus* L. subsp. *agrestis* (Kern.) Vollmann, Fl. Bayern 757 (1914)—*C. crispus* L.  $\alpha$ . *congesta* Fr. et Sav., Enum. Pl. Jap. 1 (2): 257 (1875)—*C. crispus*  $\beta$ . *monocephala* Fr. et Sav., l. c. (1875)—*C. crispus* L., sensu auctt. aut fl. Japon et Kor. aut fortasse saltem fl. As. Bor.-Orient. (東京都立大学牧野標本館)